
HEART・OB・KILLER

黒崎 達哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HEART・OB ・ KILLER

【Nコード】

N6986V

【作者名】

黒崎 達哉

【あらすじ】

現代日本とほぼ同じ世界。 鏡は、とある事情で異常な力を持つ公立高校一年生の、真田 鏡は、とある事情で異常な力を持つていた。

親友や友達、義妹や生徒会長にその他諸々、そんな奴らに囲まれて、普通に生活していく鏡。

面倒くさがりで、それでいて意外に仲間を大切にしたり。

そんな性格の持ち主である鏡は、その力を使ったり使わなかったりして日々を気の向くままに、自分に正直に生きていく。

プロローグ

『今日未明、市で男女含む大学サークルのメンバー、4人が殺害されました。犯人はいまだに捕まっていません。先日近辺の××市で起きた、殺人事件の犯人と同一、または、関係があるとして、警察は調べを進めています。お次は、3年前、この事件の市と同じ場所で起きた、大量殺人事件で亡くなられた方たちの親族の声で』
プツン

「フア〜」

俺の名前は、真田さなだ 鏡きょう公立高校一年生である。

(朝から気分落ちるな〜。)

ニュースを見た俺は、欠伸をしながらそんな事を考えていた。

トントン

俺は、制服を着て、二階にある部屋から階段をおり、一階のリビングに向かう。

「おはよう。何食べる。」

義母さんが俺に、訊いてくる。

「いつもと同じで。」

この人は、俺の親父の再婚相手だ。十歳以上年が離れているらしい。トントントンと意味深なりズムで階段を降りてくる足音。

「あたしは、パンとベーコンエッグお願い。」

そしてこいつが、再婚相手の娘さん。
舞香という。

真っ黒な髪を後ろでくくっている。
いわゆるポニーテールというやつだ。顔立ちは整っていてとても可愛い。

ちなみに、同い年である。

この舞香は、同じ高校に通っている同級生で、入学当時に廊下ですれちがった事も多々あった。
全くの他人であつた俺たちは、ある日、一瞬にして家族と呼ばれるものになつた。

因みに、俺の方が早生まれだ。

俺は、親父に付き合つてる人がいると言われ、その事はしつていたのだが、これは流石に予想外だつた。
向こうは知っていたらしいが……。

「おはよう。」

俺は、一応あいさつをしておく。社交辞令だ。

「ああ、うん。おはよ。」

そして、特に会話をする事もなく食事をとる。

別に、仲が悪い訳ではないが、別段よくもない。

なので、俺とこいつの間にはいつも沈黙が付きまとう。

顔は可愛いが、俺は別にこいつの事はどうだっていいのだ。

数ヶ月前まで他人だつた訳だし、仲良くなりたくない訳ではないが、

積極的に仲良くしようとは思わない。
いつも微妙な雰囲気になるのだが、別にいいと思っている。
向こうもそう思っているだろう。それでいい。

朝食を摂ったあと、俺はいつもすぐに家を出る。

舞香と時間が合わないようにだ……。

玄関で靴を履いた俺は、今日もメンドい一日を過ごす気合いを入れるため、ブラックガムを口に放り込んだ。

「行ってきます。」

「おつす、おはよう。」

そうやって俺に、話しかけてきた奴、親友の寺田てらだ 春はるだ。中学
校時代に知り合った。

「おう、おはよう。」

俺は、通学路で親友と他愛ない話しをしながら、学校に向かって歩を進める。

二分後、メンバーにもう一人加わる。

「おはようー。二人とも」

これまた、中学校時代に知り合った奴。

おお、と返事をする。春も似たように返事をしている。

「なになに、二人とも。テンション低いね」

こいつの名前は、大鳥おおとり 奈美なみ

茶色がかった髪はボブカットにされていて、色を抜いてるわりには綺麗な髪だ。

顔も可愛く、元気で話しやすいので、男子にもかなり人気がある。

因みに、春は地毛が茶色く癖のあるかみで、整髪料を使い、八方にハネさせている。

顔立ちは上の下ぐらい。

俺は、遊びのない真っ黒な髪だ。前髪は目にかかるぐらいの長さで、えりあしもかなり伸ばしている。

そして、天然のスーパーストレート。

髪は、自分でみてもツヤがあり、母親の血を受け継いだということがわかる。

顔立ちは自分では整っている方だと思う。

「お前が高すぎなんだよ。」

春が言う。

「だって、今日は三時間だよ。遊び放題じゃん」

奈美の言うとおり、今日は職員会議により、三時間授業なのだ。

「よかったな。」

俺は、そう言って奈美にカロリーメイトをやる。

「ありがとう」

そう言って早速食べ始める奈美。

ふむ、可愛い。

「そういえば鏡、お前の親父の再婚相手って鈴見の母親らしいな。」

春が何気ない感じでいった。

それと同時にむせる奈美。

「ゲホッゲホ。嘘でしょ？」

奈美が問いつめてくる。

「いや、マジだ。」

俺は、普通に返す。

「そっかあ、だからあの時……」

小声で何かを思い出すように呟く奈美。

「どうした？」

何だろう？気になんな。

「ううん、何でもない。てか、舞香とちゃんと仲良くしてる？」
舞香？呼び捨て？

「ああ、そういえばお前って鈴見と仲いいもんな。」

春が、思い出したかのように言った。

「うん、あたしの友達なんだから、仲良くしてよね鏡。」

マジかよ。ってことは……。

「なんか俺の事訊かれたか？」

俺は言う。

「訊かれたには訊かれたけど、鏡には教えない」

やっぱりな。

「そうか、まあしょうがないな。一応、女の子同士の話しだしな。

無理に聞こうとはしない。」

俺は、馬鹿にするように笑って言う。

「一応って失礼でしょ。こんな可愛い子つかまえて。」

奈美が笑いながら言った。

。

。

。

俺たち三人は、普通に喋りながら学校に向かい、クラスが違う春とは下駄箱で別れる事になった。

教室に入った俺と奈美は、自分たちの席に向かう。

俺が窓際が一番後ろで、奈美は廊下側から二番目の列で一番前。

「おっす。」

俺の前の席にいる奴に、呼びかける。

「んっ？ああ、お前か。」

体を反転させてこちらを向くそいつ。

「おう、俺だよ長谷川。何やってんの？」

この男子生徒の名前は、長谷川 裕人という。

こいつは、一年生にして剣道部部长。

かなり強いらしい。

「部活での対戦校との戦績を書いた表をつくってる。顧問に頼まれてな。」

「ふん。何か手伝うか？」

俺は長谷川に言う。

「いや、大丈夫だ。もう大体終わってるしな。」

長谷川は、頭をかきながら言った。

「そっか、わかった。」

俺は、腕を枕にして夢の世界に旅立った。

「いいかげん、起きろー？」

「ツっ？」

耳元にて、大音量で怒鳴られた俺は、イスを倒して跳び上がった。

「何だ？地震か、それとも宇宙人か？」

俺は、辺りを見回す。

すると、目に入ってくる女生徒の顔。

奈美だ。

「いつまで、寝てんのよ！もうかれこれ二時間は寝てたんじゃない

？」

何だ？こいつ何言ってるやがる。

「それより宇宙人は？」

俺がいうと、近くにいた女子生徒が数人わらった。

「なに寝ぼけてんの？もう二時間目が終わったのよ？」

ああ、そっぴや、今は学校だったな。寝ぼけてたのか。

「起こしてくれてサンキューな。」

「別に、いいよ。てか2時間もよく寝れるね。」

奈美は、俺の隣の今は空いてる席に座りながら言う。

「昨日は、3時間しか寝てねーんだよ。」

俺は欠伸をしながら言った。

「どして？」

奈美が訊いてくる。

「…別にたいした理由はねーよ。」

俺は素っ気なく返す。

本当は、これには理由がある。別に不眠症とか、精神異常者とかではない。

これにはもっと複雑な理由があった。

……まあ、それは後ほど語る事にしよう。

俺は、眠気を覚ますため、一階の自販機に飲み物を買うに行くことにした。

プロローグ（後書き）

全然話しが進みません。なのに、文だけ長くなって……。主人公の力の事も全然出てくる気配がないし……。m | | m
ま、まあストーリーはある程度は決めているので、引き続き、読んでいただけたらと思っています。

第一話

明凜高校生徒会長

「ぶ〜。」

俺は、喉が渴いたので自販機に足を運んだ。

この学校の自販機は全部で四ヶ所あり、それぞれの学年の校舎の一階と、このロータリーに設置されている。

別に、一年生の校舎にもあるのだが、そこには、なっちゃんがないので、俺は基本的にこの自販機を使用する。

ゴクゴクッ

「ぶは〜。」

やっぱり喉が渴いた時には、なっちゃんだな。

因みにオレンジだ。

「いい飲みっぷりね。」

ん？

「新生の真田くんでしょ？」

そいつは俺に向かって言った。

「そうっすけど。なぜ俺の名前を？」

そいつは、サラッサラの髪を腰あたりまで伸ばした女だった。見た限りではやばいくらいの美人だ。

和って感じの。

「知ってるわよ、有名なもの。」

女は自販機に金を入れながら言う。

「うちのクラスの男子がこぞって言ってるわ。明凜高校最強は一年の真田だって、アイツに勝てる奴はいないって。ああ腕っ節がね。」

女は飲み物を手に取る。

買ったのはミルクティーらしい。

「そうですか。多分その人たちは何か勘違いしています。大方俺の噂を聞いて、俺を勝手に強い奴だと決めつけてるんでしょ。」

ペットボトルを傾けながら言う。

「なんたって俺は、普通の高校生ですから。」

まあ、最強というのも、あながち間違いではないと思うが……。

タイムマンではまず、誰にも負ける気がしない。

てか誰にも負けた事がない。

この言い方は正にピエロだろう。

それと俺が絶対に負けない要因が一つある。

それは俺の力の事だ。

この力とは俺が、さ」とか言うわりには、中学時代はヤンチャして

たんでしょ。」

こいつ、話のこし折るんじゃないよ……。

「はあ。まあふつつの奴らより少し、エネルギーは多かったほうだと思えますが……。」

中学時代の俺は、確かに多少荒れてたかもしれない。

まあ、これにも理由があったんだが……。

「その他人行儀な話し方やめてくれない？別にタメ口でいいわよ。」
女はミルクティーを振りながら言うてきた。

まあ、俺も敬語なんて面倒いし使いたくないが……。

「君何年生？」

「二年生よ。」

「やっぱ先輩か。一応先輩には敬語っていうのがマナーなんだけどな……。」
まあ、いいか。

「じゃあ、これでいいか？」

俺は、結局タメ口で接する事にした。

「うん。いいわ。」

そう言っつて、女はベンチにミルクティーを置き、俺に近づいてくる。そして、俺との距離が30センチほどになった時俺の目を見て言った。

「ていうか、あたしの事、覚えてないの？」

「っは？」

俺は、訳が分からず聞き返す。

「だから、あたしの顔。どっかで見た事ない？」

女は俺にさらに詰め寄ってくる。

「悪いけど、どっかで会った？」

こんな美人だ、一度見たら忘れなと思うんだが…。

「やっぱり憶えてないか。まあ、鏡くんにとっては大した事じゃなかったそうだしね。」

女がそう言っつと、見計らっていたように授業の予鈴が鳴る。
キンコーン

「もう少し話していたかったんだけど。」

女はそう言っつて、立ち去ると思いきや、更に近づき俺の首に手を回

す。

「憶えてないんだったら、もう一度名前を言うわ。あたしの名前は、椿姫……。立花椿姫^{たちばなつばき}。あとここ、明凜高校の生徒会長もやってるわ。

」

生徒会長？まじか？

入学時から有名だった。

この高校の生徒会長はかなりの美人で、それにかかなりの頭の良さを
持っている。

俺が普通に驚いていると立花生徒会長が言った。

「そういえばあたし、あなたの事が大好きなのよ。……………二年前からずっと。」

そう言つて、首に回していた手を離れた椿姫は、二年生の校舎へと走って行く。

そして、しばらく放心していた鏡は思いだしたかのように言った。

「もうとつくに授業始まつてんじゃない……………。」

たっぷりポーツとしていた鏡が言った言葉は、誰もいないロータリーに風を吹かせた。

第二話 眠気と苛立ち

俺は、あのあと普通に授業に出た。
まあ、結局遅刻だったんだが……。

三時間目が終了したあと、俺は寄り道する事なく家に帰った。
当然眠かったからだ。

俺は家に帰り、部屋にもどって即座にベッドにダイブした。

ギシとベッドが軋む音をがする。
そして寝ようと思った時、ふと携帯を見るとどうやらメールが着てるようだった。

俺は、どちらかというところと友好的な方だが、あまり人にメールアドレスを教えていなかった。

俺のアドレスを知ってるのは、高校では奈美と春の2人だけだ。
アドレスを教えないのには、特に理由はなくてただ面倒だからだ。

俺は、欠伸をしながら携帯を開く。
文面は……。

【大変！今日は肉じゃがなのにお肉がないわ！鏡くん、大至急スーパーで買ってきて？

あたしは、今からちょっと用事があるからー！】

義母さんからのメールであった。

てかマジかよ。

めっちゃ眠いのにな……。

(はあく、まあいいか。さっさと買いに行つてすぐ寝よ。
俺は、渋りながらも結局買いに行くことにした。)

靴を履いて扉を開けようと手を伸ばす。

すると何故か勝手に開いた。

舞香が帰ってきたのだ。

家を出ようとしていた俺と、舞香の目が合う。

「っただいま……。」

「おう、おかえり。……ああ、そういえば今日の夜肉じゃがだったよ。」

俺は、閉められた扉を開けながら言う。

「ふうん、そ、そうなんだ。」

「おう、じゃあちつと出かけてくるわ。」

俺は言う。

「あ、ああ、うん。いつてらっしゃい。」

舞香はぎこちないながらも、言った。

「……ふう、それにしても舞香と鉢合わせになるとは。」

俺は、スーパーまでの道を歩く。

一応チャリンコも原付も持っているのだが、俺はなんとなく歩くのが好きだった。

そして、10分くらいたつて俺はスーパーに着いた。
スーパーでは、平日のせいか、あまり人がいなかった。
そこで肉を買い、ついでにブラックガムも買った俺はフラフラした
足取りで出口へとむかう。

（あゝ眠いなあ。）

俺は、買い物が終わったあと用事があったため、ついでに駅前に行くことにした。

ん？

「お？」「げっ、鏡！」

そこで見知った顔を見た。

春と奈美だ。

「何やってんだ。……もしかしてお前ら……。いや、何でもない、せいぜい楽しんでくれ。」
俺は微笑みながら言う。

「いや、これはね。ちょっと……。」「
奈美が慌てた様子で言う。

「大丈夫だ。俺にはちゃんと分かってる。」
俺は悟った顔でその場を離れようとする。

すると奈美が俺の腕を掴みながらいつてきた。
「絶対鏡が考えてる事は間違ってる！違うから！」

「ちくしょうっ！言うてくれればよかったのに！悪かったな、今まで気づけなくて。」
俺は、心底悔しそうに言う。

「だーから誤解だってー！」

そしてそんなやりとりを、ずっと続けていると春が口を開いた。

「まあ、鏡なんかほっというて行こうぜ。ハニー。」

それに対して奈美は……。

「ふざけんなボケ！」

そう言っつて、春の腹に渾身のボディブロー。
ごぶっ！と言っつて春はダウンした。

「オイオイ彼氏にむかってボディブローはやめとけよ。」
俺は言う。

「だから、彼氏じゃないってっ！っえぐっっっ。」

何故か泣き始めた奈美。

「えっ？ちよっなに泣いてんだよ？」

俺は奈美に近づく。

「泣いてないし！このくそ童貞！」

そう言っつて、何時の間にか起きていた春と一緒に奈美は去っていった。

童貞はねーだろ……。

俺は一人そんな事を思った。

スーパーの袋をぶら下げたままの俺は、用事をすまし家路についた。扉をあけ、リビングにいき冷蔵庫に肉を入れ、二階に上がる。

部屋へと入り、制服を着替える。

今更だが、俺は右腕にいつも包帯を巻いている。手首から二の腕までだ。

周りには火傷を隠すための物と言っつてある。

今は六月だから、薄地の長袖と、同じく薄めの生地のスウェットだ。上下共に黒。

俺は扇風機をつけ、再度ベッドにダイブした。

俺の頭の中には、立花の顔があった。

(あれって告白されたのかな？)

今になって思う。

口ぶりからすると前にどっかで会ったようだったが……。

(うーん。思い出せん。)

結局俺は、眠気に負け考える事をやめた。

。

。

。

俺は、熟睡してるところを、ノックの音で起こされた。

「鏡くん」飯よ。」

俺はハイと返事をしてベッドから起き上がり、階段を降りる。

一階では、すでに料理が並べられていた。

親父と俺のぶんだけだ。

「ああ、舞香はちょっと用事があるからって外で食べてくるらしいわ。お肉ありがとね。」

ああ、だからか。

「ああ、そうなんですか。いただきます。」

俺は特に気にした様子もなく、食べ始める。

テレビはクイズ番組を放映中だ。

黙々と食べていると義母さんが唐突に言った。

「鏡くん、舞香をよろしくね。あの子はあたしと2人で暮らしてたからか、男の子と関わるうとしないのよ。家族にもなったんだし鏡くんが仲良くしてあげて。」

俺は、はいわかりましたと適当な返事をした。

すると親父が「仲良くするっていつても、舞香ちゃんが可愛いからって襲うなよ」。一応家族だからな、場合によっては仕方がないかもしれないが、基本的にダメだぞ?」

このクソ親父はもうぼけたのか……。
息子として残念だ。

「心配しなくても手なんか出さねーよ。てか親父も仕事あんだろ? 毎晩サカってんじゃないよ。」

俺は言った。

「なっ?ばれてたのか?どうする静香!」
義母さんは「まあどうしましょ。」と頬に手を当てながら微笑んでいる。

「マジでやってんのかよ!冗談のつもりだったのに?」

そんなやりとりをしてたからか、夕飯の味が全く分からなかった。

俺は夕食のあと、すぐ風呂に入った。

風呂から上がったあと、髪をドライヤーで乾かし、歯を磨き二階に上がる。
部屋に入り携帯を確認したあとは、右腕の包帯を巻き直しベッドに横になった。

夕方寝たのにもかかわらず、俺はすぐに意識を手放した。

。
。
。
俺は夜中に目を覚ました。
いつもの金縛りだ…。

感覚だけはしつかりしている。

正確に神経が脳へと伝達をしていく。

体中の汗が吹き出る。

理由は、わかってる。

右手が異常に痛い…。

それこそありえないくらいに…。

「っ！っつ？」

右腕を延々と焼かれているような、半端じゃない力で握られてるかのような…。

俺は、痛みを耐える事しか出来ない。

両目から意思とは関係なく、涙が流れ出る。

それを一時間ほど続けていただろうか。

何時の間にか俺の意識は飛んでいたようだ。

朝起きてみると、予想通り最悪の気分だった。

俺は、起きてすぐに包帯を外す。
右腕は血まみれになっていた。

「ちっ！」

俺は舌打ちをした。

俺は一階に降りて、水道で血を洗い流し、新しい包帯を巻き直し、リビングに行った。

「今日休みます。なんか体調が悪いんで。」

俺は言う。

「ダメよ。サボろうとしたって。学校行ってそれで本当にダメだったら早退してきなさい。」

そくだ。義母さんはこういう人なのだ。

「はあ、わかりました。朝はいつもと同じで。」

俺は諦める。

朝を素早くすまし、用意をして家を出た。

「はあっはあ。」

あの金縛りがあった時は、いつもこうなる。

少し歩いただけで体中が軋んで息が荒くなり、気を抜くとある感情が爆発しそうになる。

そう、それは殺意だ。破壊衝動と言ってもいいかもしれない。

妙にイライラして、動く物、音を出す物を壊したくなる。

「クソがつ。」

俺は、小さく舌打ちをして壁を殴りつける。

バツゴンという音がして、コンクリートの壁に穴があく。

周りにいた人達はビクっとなって俺のほうを見る。

俺は、拳大の穴を開けた壁をそのままに、学校へと歩を進める。

俺は、学校へと着くとすぐに保健室に向かった。

コンコン

「失礼します。体調悪いんで早退していいですか？」

「いやいや、ダメでしょう、こんな早くから。学校きた意味ないじゃない。何？熱あんの？」

保健室の教師が言ってくる。

「いや、熱はないっす。」

「そうなの？じゃあ一応体温はかって。まあ、体調悪いんだったらちょっと寝てけば？担任には言っとくから。」

俺は、体温を測ったあと、保健室のベッドに横になった。

第三話 夢の中で

暗い世界で俺は一人漂っている。

全てが黒塗り…

自分が立っているのか寝ているのかもわからない…

どこまでも暗いその世界は俺に恐怖しか与えない…。

怖い

手足を動かしても全く進まない…

涙を流しながら、もがき続けていると不意に何か赤い点のような物が二つ浮かび上がって来る。

それは規則的に並んだまま俺にじわじわと近づいて来る。

赤い点の下には何時の間に出ていたのだろうか、布を力いっぱい引き裂いたような形。

それは顔を模っていた…

それに気付くと俺は真っ先に後ろを向いて逃げた。

それは手も生やし俺を捕まえようと徐々に距離を詰めて来る。

とうとう真後ろにまで来られ、俺は右腕を掴まれる。

その握力は尋常じゃなく、まるで俺の手を引っこ抜こうとしているみたいだった。

もうダメだ！

そう思った時何か、光が見えた。

その光は手の形をしており、俺はそれにむかって思いきり手を伸ばす。

俺の手が光の手をつかみ握手のような形になると右腕から圧迫感が消えた。

その光はそれを確認したのか、おれから離れるように向こうに歩き出した。

。

。

。

「行くな！」

俺が叫ぶと何かが視界の端でビクっ！と飛び跳ねるのが分かった。

俺は自分の声が生々しく響いた事で、今までののが夢だったと言う事に気づく。

体を起こし、その“何か”を確認すると、それは見知った顔だった。

「ビックリした〜。何？悪い夢でも見たの？」

「……………奈美？」
大鳥奈美だった…。

「そつだよ。超絶美少女戦士奈美さんだよ！てか寝ぼけてんの？」

「いや…奈美、お前俺の手に触ったか？」
俺は手を開閉しながら問う。

「っ！？いえいえ！触ってませんですよ！！断じて誓って、手を握つたりなんかしてませんよ！？」

分かりやすい奴だ…。

「よつと、よく寝たよく寝た。」

俺がベッドから立ち上がり伸びをする。

「いやね、別に変な事する気は無くて…うなされてたみたいだったし…もしかして怒っちゃってる？」

奈美は小声で言う。

別に怒ってなんかいないんだが…むしろ…
うっん

「てか、何でお前ここにいんだ？」
至極普通の質問。

「だって教室にいなかったし、休みかと思ったら、保健室で寝てるって言うじゃん？だから、お見舞いに行こうと思って。」

奈美はコーヒー牛乳買って来たと言って茶色にカラーリングされた紙パックを俺に向かって放る。

俺はそれを受け取ると、朝台に置いた鞆を持ち保健室を出ようとする。

「待つてよ〜」

奈美は俺の後ろに着いて、自分用の紙パックをストローで啜っている。

俺は少し、後ろを向いて奈美と視線を合わせると、コーヒーを持ってない方の左手を見せながら言う。

「…………サンキューな、奈美…………。」

「え？何が？…………ああ、まあこれからもね！うなされたら言いなさい！！この奈美さまに！」

本当にこいつは…………

俺は前を向くと、笑いが零れそうになる口を必死に整えて、言葉を紡ぐ。

「ああ、そうさせてもらおう…………」

第四話 花の新任（前書き）

感想などございましたら、書いていただけると嬉しいですm（
ー）m

第四話 花の新任

「今年の体育祭は6月です。」

教師が例年と違う体育祭の日取りを伝えた所で、高校一年生共は騒ぐのをやめなかった。

この先生が今年からの新任教師で若く、あまり覇気がない事も関係しているだろう。

「静かに！」

教師も流石にイラついて来たのだろう。

声を張り上げ、うるさい奴らの騒ぎたい欲望を停止させる。

「いいですか！？君達は、もう高校生です！中学生の時の様に、義務教育ではありません！ちゃんと自覚を持って下さい！それに――

」

教師の説教はまだまだ続きそうだ。

俺は机に突っ伏して、music playerをポケットから取り出すとイヤホンを伸ばして、耳に装着する。

「――！……！――！」

教師の方をチラリと見ると、教師もこっちを見ているのが分かる。

俺は自分に何か言われているのだろう、と思い、イヤホンを取ると、それは予想通りだった。

「真田くん！先生が説教し始めた途端、音楽を聞き始めるのはやめましょう！！てか何ですか！？そんなに先生をバカにしてるんです

か!？」

何か教師の怒りが俺だけに向いて来てる様な気がしてならなかった。

「そうですね!分かりました!君がそういう気ならこっちも容赦は
しませんよ!?!それじゃ、あとで真田くんは、職員室に来る様に!」

気がした、ではなかった様だ…。

そんな俺に周りの奴らは色々な視線を浴びせてきた。

同情の視線、嫉妬の視線、笑いの視線。

嫉妬の視線は教師の容姿によるところだろう。

このクラスの教師の名前は宮下 桜と言って、
たまにいる美人教師だ。

長めの茶髪を後ろで結わいて前に流している。

…笑いの視線?

奈美の野郎だ…

(はぁ)

俺は心の中でため息をつく、不本意だが、宮下先生の説教を一身
に受けることにした。

。

。

。

職員室は二年の校舎にある為、一年の校舎から二年の校舎に行かな

ければならない。

俺は職員室に行こうと一年の校舎と二年の校舎を繋ぐ廊下を歩いてみると、最近聞いた事のある声が聞こえた。

「そうね…ああでも、すぐに予算案は出るでしょ？」

立花だ…。友達だろうか、女子生徒と会話をしながら廊下を向こうから歩いて来る。

俺は何故か引き返すと右に曲がり廊下の柱に隠れた。

立花とその友達Aさんは、案の定、重要な部屋がある方の左へと曲がって行った。

俺は息を吐くとまた、廊下に戻り二年の校舎へと歩を進める。

「危ねえ…。」

てか、どう考えても、いきなり告白された相手に普通に挨拶はできないだろう。

「何が危ないの？」

「いや、だから心の中で言ったとおり、昔の馴染みだったかもしれないのに、忘れちゃって、なのに、フレンドリーに挨拶は出来ないよな…ってことだ…ってうお!？」

俺の後ろに立っていたのはその立花だった。

「別に忘れたならいいわよ。ていつか気まずいからって、挨拶もしないのはどうかと思うわ。」

「すみません、立花先輩……」

「だから、敬語もやめなさいって……それにしても変わったわね……」
「変わった？」

俺が？

「ええ、二年前とは大違い……落ち着いてる感じがするし……顔も……大人っぽくなったし……」

立花は最後らへん、顔を赤くしながら言った。

「てかさ、まじで思い出せないんだけど、どこであったのか、教えてくんね？」

なんか自分だけ忘れてるのは嫌な感じだ。

「そうね……あ、やっぱりやめた……。自分で思い出さない。」

そう言って立花は去って行った。

「何なんだよ……。」

。。
。。
。。

コンコン

「失礼………します」

そう言って職員室のドアを片手で遠慮無しに開ける。

「来ましたか。真田くん…ていうか、開ける時の敬意が全然見られないのは気のせいでしょうか…」

俺は、気のせいですよ、と言ってドアを後ろにやった手で閉める。

「では…何故、呼ばれたか、分かりますか？」

「はい。」

「じゃあ理由を言つて下さい。」

「俺が…先生の好みだからでしょ？」

俺は先生の顔に自分の顔を近づけて言った。

「な！？な、な、何を言ってるんですか！」

先生は、顔を手で隠すと、俺を手で突き放す。手の間から真っ赤になった顔が見えた様な気がしたが、気のせいだろう。

「アハハ、冗談ですよ。俺が先生を舐めてるような態度とつたからでしょ？」

怒る先生を嗜める。

「そうですよ…何ですか。意外に分かっているじゃないですか…」

「アレ、当たった？」

「適当に言っただけだった!？」

もう！

と先生は体全体を使って起こってるのをアピールする。

この先生は中々楽しい先生だ。

「全く……悪気はないのかもしれないけど……先生をからかうのはやめなさい……」

「バレてた？」

「バレてないつもりだった!？」

そのあと俺と先生の反省対談(?)は続いた。

。
。
。

「そういえば真田くん、宮下先生って呼ぶの長くてゴロが悪くて、なんか嫌でしょう?」

「え?いや別に。」

「嫌でしょう?」

「いや、だから。」

「嫌ですよね?」

「…嫌です…」

「じゃあ、先生の呼び方は桜先生でいいですよ!そっちの方がフレ

「ドリーでしょ？」

「まあ、そうですね…では…改めてよろしくお願ひします、桜先生。」

「よろしく、真田くん！じゃあ、次の授業もあるし、教室に戻っていいですよ！」

俺はハイといって職員室から出て行く。

結局…説教は無かった。

忘れてたのだろうか…

ただ、コントをやっただけみたいになっただが…まあ、いつか。

第五話 義妹1

ある日、給食を食べ終わったあと、俺は教室に帰る為の廊下を一人で歩いていった。

そこで、気になったのが、女子生徒の二人組だった。

廊下の窓側に固まりながらこちらをチラチラと見ては何かを話している。

(なんだよ…)

5、6時限目の授業が残っていたせいか、俺は女共の話題にされるのに、少々苛ついた。

そして、目つき鋭く横を通り過ぎようとした時、俺は二人組の一人に呼び止められた。

「あの〜」

「うん？何だよ？」

「えっと、真田くんですよ〜ね？」

「は？」

「あ、えっと、私たち…舞香の友達な…んですけど。」

まいか？MAIKA？

「えっと、舞香のお兄さんだって聞いて。」

……まいかって鈴見の事が…

「あ〜、うん。一応、そうだけど？」

「やっぱり?…あの、それで最近舞香って家でどうしてますか?」

「どうしてるって…知らんけど?」

「些細な事でもいいんです。最近舞香、あたし達と全然関わろうとしなくて…なんかあったのかなって…」

あゝなるほどね。

こいつらは舞香の友達で最近、つるまなくなった舞香の事が心配で、兄の俺に聞いてきたと…。

ああ

勝手にやってる。

てか、いちいち心配する事じゃねーだろ!

それに心配なら本人から直接聞けよ!

でもストレートに女子に文句を言えないのが俺の人柄だろう。

…ヘタレっつーな?

「ああそういえば、あいつ最近帰ってくるの遅かった気がするな。」

「本当ですか!?それで誰と何処に出かけてるとかは?」

「悪いな…俺そこまで仲いいわけじゃないからさ…」

そう言って自嘲気味に笑う俺。

「あ…なんかごめんなさい…あ、あの、ありがとございました！」
頭を下げる女子生徒二人。

「ああ。それにしても友達思いなんだな。そういうの俺結構好きだ
ぜ？」

そう言つてニンマリと笑う。

今度は自然な笑みになった筈だ。

そうしてさよなら、と言つて教室に戻る為、歩き始める。

最後に見た女子共は顔が赤かったが、熱でもあつたんだろうか？

保健室行つとけ。

。。
。。
。。

「うっす。鏡」

「ん、ああお前か。」

教室に帰つてきた俺が見たのは、俺の席に堂々と座る春の姿だった。

。。
。。
。。

「いや、それにしても最近面白い事がね〜な〜。彼女も出来ねーし。

」

「そつだな」

俺は本を読みながら適当に相槌をする。

「鈴見は彼氏いんのかね」

「あ？知らねーよ。てかお前は奈美とじゃねーの？」

「あゝ？お前本気で言ってるの？」

「本気も何もお前らこの前一緒に駅の所歩いてたじゃねーか？」

「はあ、鈍感としか言えねーな……。」

「ど、鈍感？」

「おお。」

「へえ。」

「……………何かおもしれー事起きねーかな……………」

「そつだな……………」

……………

……………

。

。

。
(やっとか…)

授業が終わったのを確認すると俺は真っ先に教室を出た。
勿論帰れるからだ。それ以外に理由はない。

俺は今日はチャリンコで来た。
ポツケからキラクターのキーホルダーが付いた鍵を取り出すと、
鍵穴に差し込む。

ガシャンと軽快な音がなりタイヤの回転をせき止めていた輪っかが
半円になる。

俺はスタンドを蹴ると勢いよく前にチャリを押しこれまた勢いよく
跨る。

速攻で家に帰ってやるーと思っていた俺の体に伝わったのは、いつ
もの買い物メール、すなわち命令文だ。

俺はため息を吐くと、進路方向を行きつけのスーパーに設定する。

。
。
。

買い物物の後、チャリンコで家に高速で走っていると、知ってる顔を
見かけた。

黒髪のポニーテール。

義妹だ…。

よく見ると男と歩いてあるのが分かる。

(へえ)

その表情は嬉しそうで二人が恋仲にあるのが分かった。

「おっと。」

俺はまたチャリンコを走らせる。

第六話 義妹2

「AM7h」

「フア〜」

今日は土曜日で休日だ。

俺が通っている高校は、隔週での授業であり、二週間に一度はこんな清々しい土曜日もある。

「朝日が気持ちいいぜ…。」

二階のベランダに出るとそんな恥ずかしい独り言を呟く。

誰にも聞かれていないからこそできる芸当だ。因みになぜ、そんな気分よさげかと言うと、何でもない、休みだからだ。

部活も委員会も校外活動も全くしていない俺は、こうやって休日の日は全く意味のない事を平然とする。

これが高校生だろう。と若干不安ながらも思っている。

俺はサンダルをカラカラ鳴らしながらベランダから中に入ると、いつもより早く起きたこともあって……………何をしようか…。

(う〜ん。平和な悩みだな。)

いつも休みの日は基本昼起き。

口うるさい義母さんも、休みの日は起こさないからだ。

「…立ち読みでもしに行くか……………それとも、春か、奈美を誘つか一日中ゴロゴロしてるか……………どうする。」

俺は自分で言うのもなんだが、ブツブツ呟いて、危ない奴になりかけていた。

「よし、立ち読みだ!!」

俺は叫ぶと、スウェットにシャツという格好に、パーカーを着て家を飛び出して行く。

家の前にある原付に鍵を差し込みエンジンをかけると、久しぶりに聞く騒音。

「俺は風になる!!」

多分青い人に見つかったら、職質されるだろうか、そんなぐらいのス皮ドで、俺は道をおっ飛ばす。

「ハハア!!」

なぜ、こんなにテンションが高かったのか、俺は分からない。

とりあえず気づいた事は、これからは、早起き頑張ってみよう、という事と、ヘルメット被んの忘れた、という事実だった。

。
。
。

コンビニに入り、国民的少年雑誌を手に取ると、上機嫌のまま開く。土曜日なのに店頭に出されているのは、客の少ないこのコンビニな

らではだろう。

本当は本屋に行く予定だったのだが、8時だ。どこも開いていない。

だが、問題ない。

コンビニは年中無休だ。

そうして、店員に若干迷惑そうな顔をされながらも、俺は漫画をペラペラとめくる。

読み終わった後は、単行本コーナーにて、再度読み始める。

一時間ぐらい読んでいただろうか、遂にめばしい漫画がなくなってきた頃だ。

俺はジュースでも買って帰るか〜と思い飲み物のコーナーに行く。

「いらっしやいませ。」

店員の軽快な声が店内に響く。

入ってきたのは、遂この前、舞香と一緒に歩いていた茶髪の男だった。

（あれ？）

男は、舞香ではない別の女といた。

「そういえば信しん。この前、他の女と歩いてたって友達が言ってたん

「ただごと。」

「ああ？鈴見の事か？バカ、あいつはちげーよ。あいつさあ。少し優しくしてやっただくらいで、まとわりついてくんの。ウザってーったらありやしないぜ。」

俺はジュースを持ったまま、レジに向かう。

その間も二人は喋っていた。

「あいつ、顔だけはいいからさあ。適当に仲が良くなったら、ダチにでも売ろうと思ってんだよ。」

俺は店員の声にポイントカードが無い事を伝える。

「ありがとうございます。また起こしてくださいませ。」

店から出て、原付に跨るとジュースの口を開ける。

俺が買ったのは500m?の紙パックだ。

それを口に含むと、途端にレモンの香りが広がり、この爽やかさが、少し蒸し暑くなってきたこの時期には最適だ。

飲み終わると、原付に跨ったまま、紙パックをゴミ箱に放り込む。

フウ。と息を吐くと、俺はまた走り出した。

何だか胸くそ悪かった……………。

第七話 義妹3 (前書き)

誤字、脱字、ご感想などがございましたら、お願いします。 m ()
— m

第七話 義妹3

「はあ。」
俺は盛大なため息を吐いた。

「そんなため息ばっか吐かないでよ。なんかこっちまで嫌になって来るよ。」
今は奈美と二人で登校中だ。
春は風邪をこじらして休みだと…。

それに吐かずにいられるかよ……。
なんだって今日は月曜日……またまた、果てしなくだるい一週間が続くと思ったら…

「なあ奈美……。」

「ん？」

「ゲーセン行きたくない？」

「放課後なら行きたい。奢って？」

「……………それじゃ意味ねーよ……………」

俺と奈美はくだらない話をしながら歩く。

。。
。

。「じゃあここ、テスト出るからな。復習しておく様に。じゃあ終わりだ。」

気をつけ、礼と、定番の挨拶をすると同時に騒がしくなる教室。

「やっと……6時限目が……終わった……」

俺は机にぐったりと突っ伏すと、息も絶え絶えに呟く。

「確かに数学科の教師はつまらない授業しかないが、国語などは他の高校に比べると幾らかマシだぞ？」

長谷川がメガネの位置を調整しながら、俺に問いかける様に言う。

「俺には全部一緒な感じだけだな……」

全く疲れを感じさせない表情の長谷川に、俺は苦笑いしながら返す。

「境」

奈美がトコトコと、効果音が聞こえる様な歩き方で近づいてくる。

「何だよ？」

「お客さん。生徒会長が。」

俺は何か嫌な予感がした。

「人違いだ。帰ってもらってくれ。」

俺は非難訓練の時の様に、机の下に潜り込みながら言う。

言動はアホ丸出したが、表情は真剣そのものだ。

「え？でも、真田境君を呼んでって言ってたよ？」

「どうせ、廊下の展示物から名前を読み取ったのだ。冷やかした。そくに違いない。」

俺は自分でも何を言ってるのか分からなかった。

「冷やかしじゃないわよ？」

「ウオ！」

何でこいつはいつも俺の後ろを取るんだ？

「こんにちは。」

立花が奈美に向かってニコリと話しかける。

「え？ああはい、こんにちは。」

それに馬鹿正直に頭を下げながら返す奈美。

「こんにちはじゃねーよ…で？なんの用だよ？」

俺の少々ケンカ腰な態度にも気後れする事なく立花は話し始める。

「その娘は？」

「え？」

質問に質問で返すとは……

「こいつはええっと……大鳥奈美だ。」

俺が少々意味ありげな感じで、質問に答えると奈美がわめき始める。

「今苗字忘れたでしょ!？」

「どんな関係？」

立花は無表情に奈美をスルー。
なかなか空気の読める奴だ。

「クラスメイト……いや、友達だな。」

俺がそう言うと、何処か不満げな奈美に、若干嬉しげな立花。

訳が分からない。

あ、もしかして。

「いや、親友だな。」

そう言って奈美に笑いかけてやる。

すると、ますます不満げな奈美に、何かを察した様な立花。

(???)

「まあ、今日はちょっと約束の取り付けをしに来ただけ。明日の昼、屋上にいらっしやい。いい物をあげる。」

そう一方的に言つと、切り上げていく生徒会長。

いい物つて…?」

「それにしても、境つて生徒会長さんと知り合いだったの?」

奈美が浮かぬ表情で聞いてくる。

「うん。まあ、そうかな…?」

「何で疑問系?」

「んな事より、お前何か気分悪そうじゃね?大丈夫かよ?」

「…大丈夫じゃない…。」

「おいおい、保健室行くか?」

「いや……境がゲーセンに付き合ってくれたら、治るかも…。」

「は?」

「うん。駅前のがいいな。うん。よし、出発!」

俺の手を引っ張りながら、教室を出ようとする奈美。

それに、俺は苦笑いしながらも遅れないように、足を動かす。

今日は帰って直ぐ様、惰眠を貪ろうとしていたのだが、ついつい口をついて、出てしまおう言葉。

「まあ、いつか……。」

。

。

。

俺は奈美に散々クレープやら、なにやら奢らされた後、奈美を家に送り届けると、家路についた。

奈美の家は駅から少し歩いた所にあるから、実質駅から帰ってるといっても過言ではないだろう。

そうして、中々知ってる奴はいない、裏路地を通って家に帰ろうと思ったのだが、その日は勝手が違った。

いつも酔いつぶれてるおっさんやホームレスしかいない路地裏に若者が5人程いた。

(ん?)

その中には女もいるらしく、中々にヤバそうな悲鳴を上げている。

どうしよっかな…と考えながらも隠れながら様子を伺っていたが、フツと、見えた顔に俺の脳が反応する。

俺の視線の先には鈴見舞香がいた。

……
……

俺は頭をポリポリかくと、ため息をついて、ブレザーの袖を捲り、
包帯を解いた。

何で…？

彼氏に呼ばれてある場所に行くと、彼氏はあたしの腕をとって路地
裏へと入っていった。

あたしは迷いもせずに、それについて行き、そして、絶望した。

「お前さあ、顔はいいからさ。俺の事が好きならこいつらの相手し
てやってくれ。一人1万だぜ？一万。」

涙が流れた。

あたしは騙されたのだと。

複数の男に押さえつけられると、あたしは身動きが取れなかった。

あたしはついこの前、この男に告白された。

あたしはこの男が優しい人だと思っていたし、すぐにOKをした。

その結果がこれだ。
呆れる程見る目が無い……。

悔しくてたまらないのに、非力なあたしではなにも出来ない。

ただ、恐怖に泣き叫ぶだけ……

「うづう……」

服を脱がされ体を触られる。

誰か…助けて…。

そう願っても助けは来ない……それを分かっててそう願った。お父さんが病気でなくなった時もこうやってお願いしたけど、結局ダメだった。

どうしてあたしは……

「悪いな。そいつ俺の妹だからさ。」

不意に聞いた事のある声が聞こえた。

。
。
。

（う、うん。流石にあんなに泣き叫んでたらな〜。）

俺は不良五人と対峙している。

「誰だ、お前？」

一人の不良が聞いて来るが、俺は言ってやった。

「一応、そいつの兄貴かな？」

疑問系で言ったのは恥ずかしかったからじゃないぞ？決して。

「ああ、何？お前兄貴いたの？」

あの茶髪の男が舞香に問いかけるが、我が妹は沈黙したまま、こっちを見ている。

「まあ、いいや。見られたんじゃない…裸にひん剥いて、写メでも撮つちまえば、こっちのもんだろ。」

茶髪男が言うと、他の四人が一斉に襲いかかってくる。

まず一人の不良が鉄パイプを思い切り振りかぶる。

それを振り下ろすが、俺は右手で受け止める。

「なっ!？」

不良共が動揺したのが目に見えて分かった

俺は掴んだ鉄パイプ握りつぶすと、鉄パイプを持っている不良のこめかみにブレードをこまし、そのまま持ち上げる。

男は今、俺の手に吊られている状況だ。

泡を吹き、白目を向いている。

「クソがあ！」

もう一人の不良が襲いかかって来るが、そいつに俺はつかんでいた不良をぶん投げる。

面白い程よくぶっ飛び向かってくる不良に当たると、二人して、仲良く飛んで行き、路地裏の壁にぶつかって気を失った。

「な、なんだこれ…？」

茶髪の男が言うが、恐怖に耐えられなかったのか、残り二人の不良は同時に襲いかかってくる。

俺は一人のパンチを頭を屈めてよけると、軽く腹を小突いてやる。

それだけで、ドゴ！とまるで、バットで思い切り殴ったような、鈍い音が響く。

殴られた不良は地面に膝をつき、ゲロリながら気絶した。

残る一人は固まってる時に足を掴み、ぶん投げてやった。

同様、壁にしたたかに背中を打ち付け、視線を右往左往させながら気絶した。

残るは茶髪のあいつだけ。

俺が近づくと、男はビクリと肩を震わせる。

「ひっ！？ば、化物！」

ああ？……まあ、その通りだけどよ……。

俺は男を睨むと、路地裏の壁を殴る。

壁はまるで発砲スチロールのように、その姿を変形させた。

「お前もこうしてやろうか？」

そう言うと、男は、足をカクカクさせながら逃げて行った。

残されたのは某然としながら俺を見てくる舞香と、体調の悪い俺だった。

「何で…？」

舞香は下着姿に申し訳程度服が引っかかっている姿で、俺にどう答えればいいのか、わからない質問をした。

俺は目のやり場に困りながらも、今だに目の赤い、舞香の頭をそつと撫でて、抱き寄せると、ポンポンと背中を叩いてやった。

そうすると、まるで糸が切れたかのように泣きだす舞香。

俺はなにとも言わず、ずっと舞香の事を抱きしめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6986v/>

HEART・OB・KILLER

2011年11月27日03時45分発行